

身体的な音楽学習活動による「協同実践の創造」

—モノとの関わりを通じた社会情動的スキルの育成—

Creation of cooperative by means of physical music learning activities

—Fostering social and emotional skills through tools—

猶原和子*, 渡辺行野**

【要約】

本研究では、モノとの関わりを通じた音楽学習活動を仲間と協働して行う中で、どのように表現が変容していくのか、社会情動的スキルへの育成に寄与したのかということに対する検証を試みた。カップ、大縄、まりを用いた音楽遊びを通して、学習者の身体がモノや他者と対話し、新たな表現への意欲につながる姿が見えた。また、他者との協働の中で共感や異なりを意識するなど、異なる視点や価値観が行き交う中で、表現の質が音楽的にも高まり、社会情動的スキルに寄与したことが記述分析からも明らかになった。授業者の鑑識眼と研究者としての批評家が更に質の向上を求め批評し合いながら意味生成を行っていくオープンエンドの授業構成を考えていくことが今後も重要だと考えられる。

【キーワード】 社会情動的スキル／音楽／表現／協同創造／身体／鑑識眼

1. はじめに

これからの社会に求められる新しい能力について、新学習指導要領の改訂（文部科学省, 2018）では新たな視点として非認知能力の重要性が提唱されている。また、非認知的能力は社会情動的スキルとも言われる（OECD, 2015）が、保育現場や教育現場における保育・学習活動においても各発達段階に応じた社会情動的スキルに寄与する実践が展開されようとしている。無藤（2016）は、このようなスキルを「目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と強調して取り組む力や姿勢」として述べている。

将来、園や小学校で働くことを夢見て保育者や教師を目指す大学生たちは、知識社会におけ

るイノベーションやグローバル化の中で、多様な背景を持つ子どもたちの発達を考え、子ども自身で主体的に活動を生み出していく学習環境を設定する力量を持つことが望まれる。

しかし、今の日本の保育・学校教育においては、教師の掲げた目標や評価基準に沿う反応が求められ、学習者の意見が活かされていないことが多い。自分の興味関心から学習内容や方法を考えたり、自ら問いを発見して探究したりする営みを経験してきた学生は極めて少ないのが現状である。

今後、保育や教育の質を向上させるためには保育士や教師の社会情動的スキルを伸ばすことが欠かせない。異なる立場の人の意見を聴き、自分との共通点や相違点を知り、様々な価値観を受け止めながら、自らのよさも自覚していく。自らの課題をもってその人らしい行動ができるような経験を大学教育の場で行うことが求めら

* 江戸川大学マスコミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科 教授

** 文京学院大学人間学部児童発達学科 助教

れているのではないだろうか。

また、創造性は、社会情動的スキルと同様、知能の尺度とも関わっていることが明らかになっており、「メタ分析は、舞台芸術や向社会的活動への参加が、アイデンティティや自尊心と強い関係を持つこと」を示している (Lewis, 2004)。OECD (2015) の調査によれば、Covay and Carbonaro (2010) による米国における研究では、音楽のレッスン、ダンスのレッスン、舞台芸術活動、芸術のレッスン、スポーツ、放課後のクラブに参加する小学生は、こうした活動に参加していない者に比べ、より高い注意力、秩序、柔軟性、課題に対する粘り強さ、学習における自主性、学習に対する意欲を見せることを示しており、ドイツのGerman Socio-Economic Panel に基づく大規模縦断調査研究においては、音楽のトレーニングを受ける青年は、より勤勉であり、解放的、野心的である傾向があることを示している (Hille and Schupp, 2015; OECD2015)。さらに、演劇やダンスなどの舞台芸術活動が社会情動的スキルを強化する可能性を示す研究もある (Winner, Goldstein and Vincent-Lancrin, 2013; OECD2015)。

では、どのような音楽学習を経験することが社会情動的スキルの育成につながっていくのかについて検討する。

授業構成について、デューイの芸術哲学をもとにアイズナーの「鑑識眼と教育批評」やグリーンの「美的ワークショップ」を研究し、自ら教育現場で学習者や授業者とともに新たな授業構成を探索してきた桂 (2020) は、従来の目標—評価型の枠組みに対峙する「協同実践の創造」モデルを唱えている。外部からの目標・基準を設定するのではなく、協同で探究を深め、新たな視野が開かれること自体を目的とした芸術教育である。

桂は、主体性と真正の個性の発見が求められる活動を保証しつつ教師の指導性による学びの深まりをもたらすためにはオープンエンドの授業構成が必要であり、「よりよい経験」「新たな視野を得る」可能性のある芸術作品や学習材を学習者に出会わせることが教師の役目だと述べている。

教室の中で生まれた表現は、そこに集った仲間との言葉や身振り、身体接触などの表現が行き交う中で、新たな見方や意味生成が起こる。そのプロセス自体が学習者の評価でもあり、「鑑識眼」を持つ授業者らが適格に言語化することでその営みはさらに深くなるという。さらに桂は、研究者による教材開発と普及に代わるものとして、互いに例示しあうことによって鑑識眼を共有する実践家コミュニティの実現が今後必要だとも述べている。

このような研究を踏まえ、同じような課題意識を持ち、保育者・教育者養成に携わる筆者2名が、社会情動的スキルを身につけさせたいという願いをもって授業構成を考え、実践と省察を行うことにした。

2. 研究の目的と方法

【目的】

モノと関わった音楽活動を仲間と協働して行う中で、表現がどのように変容していったのか、それが結果として社会情動的スキルへの育成にどのように寄与したのかを検証する。

【研究方法】

今回はA大学で「表現 (音楽)」の授業を受講する2年生53名を研究対象者とし、筆者らが考案した授業プランを実践する。コロナ禍における表現活動が自粛される中で、モノとの関わりを通して息や拍を感じるとともに、仲間との協働した活動を通して、より創造的な表現が生まれることをねらいとし、活動のプロセスを探究することとした。

授業場面での映像記録と実践観察から学生の姿を分析するとともに、学生の記述をKJ法で分類し、テキストマイニングを用いて頻出単語の抽出を行い、分析する。

【実施期間】

調査期間	2020年10月8日～30日
対象学生	2年生 53名
対象科目	表現 (音楽) A, B

コロナ対策で対面での授業が前期はほとんど行われなかった。後期の授業では人数制限をすることで対面授業が許可された。そこで毎回100分の授業時間の中で半分の50分を対面とし、人数も半分の入れ替え制にして合計4グループに分けて行った。残りの50分は振り返りとオンデマンド課題を行うこととした。

【取り上げた題材とねらい】

次の3つの活動を対象に、学生の身体の中にあるリズムや拍感に着目しつつ、他者との協働をみつめていくことにした。

①カップス

映画「ピッチ パーフェクト」で世界的に大流行した、コップを〈Cups〉の音楽に合わせて歌いながら動かす活動である。基本の動きを各自で覚え、英語の歌詞も歌う。その後、グループでオリジナルな動きを工夫し、さらにこの活動にあう音楽も探し、それぞれが工夫した音楽と動きを発表しあう。

②大縄を使った遊び

大縄を歩いて通ることで、縄の動きと自分の身体を意識することを目指す。次に大縄跳びとして〈郵便屋さん〉と〈大波小波〉を選んだ。大縄の動きを感じて自らの身体を動かすタイミングを選ぶと同時に、大縄を回す側が歌と動きのタイミングも意識も意識するように働きかける。

③まりつき

子ども用の“まり”を用い、〈あなたがたどこさ〉〈いちりとらいらい〉の2曲に合わせて、自分でつき方を工夫する。両足だけでなく手の動きや回転など独自の動きを取り入れて、数人ずつ考えた動きを発表しあう。

これらは、いずれも音楽を身体内で感じ、歌いながらモノと関わって身体を動かす活動である。個々の達成感だけでなく、他者と合わせる喜びや、近くの他者の動きや発想に触発されて、どのように表現が変化し、深まっていくのかをみつめることを大切にしたい。

3. 実践での学生の変容

毎時間15分程度の活動だが、継続する中で、様々な変容が見られた。

①カップス

昨年の2年生がコンサートでカップスを発表したのを見ていたので、映画の場面を示すと多くの学生が興味深そうに見ていた。中学や高校で経験したことのある学生も4名いた。

実際に動かすと、初回は「難しい、テンポが速すぎる」という声が多く挙がった。Aは真面目だが運動が苦手。初回はゆっくりしたテンポでも動かすことができず、途中からは一人だけじっと仲間の動きを見ていた。2回目になると間違ってもあきらめずに続ける姿が見られた。リモート課題として載せた映像を何度もみて練習したのだと言う。同じように練習した学生もいて、コップを動かす音もそろってきた。そこ



写真1 カップを回す



写真2 動かし方を工夫する

で、全員で輪になって動かしてみた。Aは「最初こそしどろもどろになりながら、なんとか他の人に合わせている状態でしたが、回数を重ねるにつれて全員で息を合わせることを意識してカッスをを行うことができ、全員と合奏や合唱をしている時と同じようなつながりを感じられました」と振り返った。

他の学生からは、「一人でやるのも曲やリズムと調和できて楽しいものでした。しかしこのカップの“コンッ”という軽やかで気持ちのいい音が何倍にも重なると音に厚みが出て、とても団結したいいい音が出ました。一つも乱れずに重なったときなどは“全員で一つの音楽を楽しめている”，“音楽で心を通わせる”という音楽の良さが最大限に広がっている空間だと感じました」という感想もあった。

失敗して自分のところでリズムを崩してはいけないなというプレッシャーを感じながらもみんなで作るのが楽しかったという声が多く寄せられ、他者と共に活動する楽しさ、音や動きの揃った心地よさが伝わってきた。

次に〈新しい技を工夫する〉活動を提案すると、近くの人とグループになったものの展開は様々だった。ハイタッチを入れてみたりカップを動かす方向を変えてみたりする動きを考えて楽しそうに行っているグループもあれば、その姿を見て、模倣も交え、ようやくカップを一緒に合わせたり手を合わせたりと工夫し始めるグループもあった。

Bは「最初の意見を出すまでは少し悩むことが多いけど、一つ意見が出るとどんどん出てきて取り入れられるか考えたり難易度的にどうか悩んだりするのがすごく楽しかった」と話した。簡単すぎず難しすぎない動作を取り入れるということを考えるようになったBには、異なる意見を交流したことで新たな表現を生み出す喜びとさらに深めたいという欲求が感じられる。

最後に自分たちで曲を選び、発表しあうという活動を行い、以下の曲が挙がった。

- 7票：「パプリカ」
 6票：「上を向いて歩こう」
 5票：「アンパンマン」
 3票：「森のくまさん」「うちで踊ろう」
 2票：「らららコッペパン」「大きな栗の木の下で」「アルプス一万尺」「線路は続くよどこまでも」「きらきら星」「We will rock you」「カエルの歌」
 1票：「さんぽ」「おつかいありさん」「勇気100%」「歯をみがきましょう」「焼き芋グーチャーパー」「手のひらを太陽に」「おもちゃのチャチャチャ」「it off」「Call me Maybe」「小さな作戦」「ともに」「トリノコシティ」「Let it Go」「Guts!」「Live While We're Young」「I really like you」「Love so Sweet」「やってみよう」「春が来た」「アンチジョーカー」「空はみている」「夜に駆ける」「マイムマイム」「This is Me」「ダーティー ワーク」「Make you happy」
 など

選ばれたのは2拍子や4拍子の曲である。選ばれた曲と仲間の動きをみて、どのテンポが動かしやすいか、曲の流れと拍と動きを意識するとともに、「意外な曲とマッチした」「個性的なアレンジを観ることができて、次は自分もやってみたい」と新たな意欲につながっていった。

②大縄跳び

縄の動きとテンポを自分自身の身体で受けとめることが難しそうで、初回は怖くてできないうずと端に立って見ていた学生もいた。やがて、「斜めよりも縄を回している人の近くを通ればいいんじゃない」と試す学生が現れ、他の学生も動きや音を意識し始めた。

「今日意識してみると、目でもしっかり見ていたけど、意外と床に縄が当たる音で判断していると思いました。縄の当たる音がしたら自分が入るという考えで大縄をくぐっていることが分かりました。」

「縄が地面についている時を“表拍”ついていない時を“裏拍”というように音楽と同じ風に考えたら、うまく潜ることができるようになりました。ただ潜るのではなく、拍を感じて潜ることがポイントだと思います。」



写真3 大縄を歩いて通る



写真4 歌に合わせて跳ぶ

「リズムを聞いて入るといよりは縄を見てタイミングを見計らってくるということを意識しました。縄が下について自分側じゃない方に行った時に入るなど心掛けました。」等の学生の振り返りからは、

何度もくぐり抜ける中で、大縄と自分の身体との応答を自らの言葉にして理解しようとしているように感じられた。

大縄跳びの曲としては〈郵便屋さん〉と〈大波小波〉を選択した。大縄を回す側のタイミングも重要である。「大縄を回すときに私は腕だけを使って回していましたが、膝をまげてリズムをとっている人がいて、その方が跳ぶ人もリズムをつかみやすくなるのかなと感じました」と書いた学生もいる。大きく回すときにたるんだり、テンポがずれていったりするのを感じ、両手で持ったり腰を落としたりと次第に変化していった。思ったタイミングよりも縄が回るのが遅くて「跳んでる時間を維持しなきゃだから大変」という声も聞こえた。全員が持ち手にもなってみたことで、うたに応じた強弱や、輪の動きに合わせた飛び方の工夫も表れていた。

大縄をくぐるタイミングが合わず、何度も転びそうになったAは「郵便屋さんの落とし物では、あえて小さく飛ぶ動作を挟むことで、うま

く動くことができるようになりました」と、自分でコツをつかんだ喜びを書いている。他者の身体の動きに自分の呼吸を合わせてみながら、自分の納得する形で跳び方を体得したように捉えられた。

回数が進むにつれ、途中で輪に入って一緒に跳ぶ学生も増えた。これは足がひっかかっても非難されないという安心感と、飛び手・回し手・待っている人の息が揃ってきたからではないかと考えられる。

③まりつき

これまで歌ってきた〈いちりとらいらい〉というしりとり歌と、多くの子が知っていた〈あんたがたどこさ〉を取り上げた。〈あんたがたどこさ〉に関しては、「さ」では必ず回すこと、〈いちりとらいらい〉では、動きながら“まり”をつき、身体を回転させてみようという提案した。

子ども向けの少し小ぶりのまりを手にした学生は最初、子どもに戻ったかのようにはしゃぎ、いろいろな回し方を試みていた。しかし、まりを持つのが初めての学生も意外に多く、思ったより小さなまりにてこずったり、動くと思った足が思うように上がらなかったりして3つの活動の中では、最も苦戦する姿が多く見えた。

「まりつきを久しぶりにやってみて、子どもの頃にこれができるのかと思うと子どもの運動能力は自分が思っている以上に高いと思いました」「意外と難しかった。ボールが小さいと足は越えやすいがその分どこか行ってしまったり跳ねなかったり、身長が子どもよりは高いので足を大きく挙げてもダメで、地面から遠いので前かがみになったり“さ”も多いのでとても難しかった」など、難しさを実感する声が続いたが、意外にも初めてまりに触れた学生からは、うまく



写真5 まりつきに挑戦

できなくても楽しかったという声が多く寄せられた。

授業者自身の経験と一番異なると感じたのは足を回すときに、ほぼ100%の学生が外側から回していることであった。そこで「まりを回すのを外からだけでなく内側からもやってみよう。両手両足も使って、違いを感じてみて。一人じゃなく複数でやる技があってもいいね」と提案した。

すると、二人で交代にまりをついたりパスしたり、手回しをいれたりという工夫が見られ始めた。

「外回しと内回しをやってみて、内側から通す方がやりやすく感じました。“煮てさ 焼いてさ 食ってさ”のところは、足を通すテンポが速くなるので忙しくて大変でしたが、自分なりに研究しながら取り組めたので、良かったと思います。」

「ボールのバウンドが弱く、リズムに合わせることが難しかったけれど、友達の2人で投げ合う動作を入れている様子を見て、無理にバウンドしなくても振り付けにオリジナルでアレンジを加えることで、曲と動きを合わせられると思いました」などの気づきが表れてきた。

一方で、最後までタイミングが合わなかった学生Aは、「難しいと感じる子がいても、きちんと寄り添って共感したり、別の方法を考えるなどしていきたいと思いました」と、自分が感じた難しさを実際の保育場面でのどのように扱ったらいいか、“できない子の立場”にたって考えたいと記述していた。

“まり”という道具と自分の身体との応答を楽しんだ学生もいれば、「思うように身体が動かず難しかった」と“まり”との距離が遠いままの学生もいて、最初の興奮とは異なる展開になった。それでも、最後の時間には、「さ」でボールを互いにパスしたり、大きくバウンドさせて回転してキャッチしたりするなど、自分に合ったまりつきの形がみえたことは、学生の学びに変容が見られたといえよう。

4回目の授業で強く印象に残っている場面がある。Cはバスケットが好きでひょうきんさを売りにしている。体育館だというので前のクラ

スの時間から来て活動を遠くから眺めていた。Aがまりつきに苦戦し、転がるまりを何度も拾う姿をみて苦笑いしていた。しかし、縄跳びのときにタイミングが合わず、なかなか縄の中に入れてなかったAが何回か肩で大きく呼吸した後、に走って入りうまく飛べた瞬間、「おー！」と言って小さく拍手した。

彼はその日の振り返りに次のように書いた。

音楽は苦手ですが嫌いではないです。音楽は楽しいものだと思っているからです。
(子どもたちには)無理に団体でやらせるのではなく、一人一人に合った音楽の楽しみ方を見つけてあげることが大切だと思います。

普段接触の少ないAの姿が自分自身を見つめることにつながったのかもしれない。他者と合わせる喜びを語った学生は多いが、彼のような気づきも異質な他者との接触があったからこそ生まれたのであり、とても重要だと感じた。

4. 自由記述からの分析

(1) 自由記述の分類でみえてきたこと

実践後の学生の記述から、特に学生の学びの変容や学習活動として意味深く感じ取れた記述を「教育批評」の視点から分類し、そこからどのような社会情動的スキルとの関連が見えてくるのかを考察する。

毎回の学生の記述と全体の振りかえりとしての学生の記述を、KJ法で分類すると、活動を通して「自身の気づきや意欲」につながるもの、「他者との協働を通して得られた」学び、身体的な活動を通して「音楽的な要素への気づき」ができたこと等が見えてきた。

下線部分は、筆者らが学生のコメントを分析した部分である。

実線は、学生が音や音楽的なことへの気付きや身体に触れられた記述として捉え、

二重線は、この活動を通して学生が更に新たな発見をしたことやより音楽的な気付きへと発展している記述として捉えた。

資料1 自身の気づきや意欲

- ・ちょっとしたアレンジで雰囲気が変わるようないい感じの振り付けをしたい。
- ・手を叩くところを隣の友達の手を叩くことにした。スピードが早いのが難しいけれど楽しい。
- ・海外の動画を見たときは、音もそろっていたので、私たちもそろえたいと思います。簡単に気楽にできるのですごく好きです。
- ・リズムが意外と大事だということに気が付きました。
- ・失敗してしまうこともあるのですが、「慣れ」や「流れ」を作ることが大事だと感じた。
- ・大縄でどこを歩いて通るかを考えました。タイミングを考えること、回している人の近くから入るのがいいかなと感じました。
- ・大縄を走らないで歩くと思っても、つい走りたくなります。真横に通ると歩いて渡れるかな。
- ・自分の中でリズムを刻みながら取り組むようになった。例えば、大縄では心の中で「はい。はい」と独自のリズムを刻んでいた。
- ・足を通すタイミングが掴みづらく、片方の手足で通すのではなく交互にしながらだったので、とても頭を使いました。
- ・もっといろいろな技とかができるようになればもっと楽しくなるのかなと思いました。
- ・難しいけれど、何回も繰り返し足の下に通すことでバランスをとることや、集中力が高められるのではないかと感じました。

資料1からは、活動に関係する色々な情報を得ながら、何が足りないのか、どのように工夫すればより良い活動になるのか、できない困難から向かっていく姿等、個々の活動を通して様々な問題に向かって解決しようとする姿が見られる。活動から得る気づきを自身の次なる目標へと転換し、意欲を持って活動に取り組んでいる姿が見られる。

また、資料2では、協力し合うことから得る学びやその喜びがあること、自分では気づけなかったことが、他者と一緒に考えることで新しい発見となること等、他者との協働だからこそ楽しいと感じられることや達成した時の喜びを共有できたことが窺える。また、身体のリズム

や呼吸を通して、合わせることの面白さや楽しさを感じていくことが、次なる試みへとチャレンジしていく意欲につながっているようにも受け取れる。他者のアイディアから刺激を受け、さらに新しい発想を生み出そうとするところから、学びが広がっていることが窺える。

資料2 他者との協働による学び

【他者との協働による学び】

- ・拍子はどこに入れるかを話し合いながら考え、実際にやってみてリズムにぴったり合った時はすごく嬉しかったです。
- ・他のグループはもっと凝った振り付けアレンジをしていたので、動画を見たり自分でももっとアレンジできるかを考えたいと思う。
- ・同じグループの人と動きを考えてこれいいね。などを通したらみんなで楽しくできるかなと思います。
- ・楽しかったです。みんなで協力しないとできないのもっと仲良くなれそうだなと思いました。
- ・他の班のオリジナルを見たのですがとてもレベルが高く驚きました。真似したいなと思いました。
- ・アイディアがまとまり、振りがきれいに拍にあったときは、とてもすっきりしたし、楽しかったです。
- ・ほかのグループの振りは違って、カップの当て方や回し方に新しいアレンジがあり楽しく見ることができた。
- ・カップをトレードするのは一番やりやすく、協力してやっているという感覚が得られた。
- ・縄の動きだけではなく、前の人の動くタイミングを意識していました。
- ・他の人と一緒にやることは難しいけれど、合わさったときの達成感が多く得られる。1人でやるよりも楽しいしもっと一緒にやりたい。
- ・お互いに声を掛け合ったり、教えあったりなどみんなで協力することによってよりよい作品、音楽が出来上がると感じました。
- ・人生で初めてやったので難しかったです。歌の切れ目で友達に渡すことなどやり、面白かったです。
- ・カップに固執していたが他の人がやっているのを見て、手を合わせる等のアレンジを入れても面白いと感じた。

- ・3人で、どうしたらリズムに合わせて振り付けをアレンジできるか難しかったけれど話し合った。
- ・アレンジは1つ動作を変えるだけでまた違った面白さがある。他のグループも様々で面白い。多くのアイデアがあり、魅力的だと感じた。

資料3 音楽的な要素の気づき

【音楽的な要素の気づき】

- ・大縄は、縄の動きを意識して、拍を感じました。
- ・拍などまだ完全に理解していないが、タイミングに合わせて体を動かすと楽しさやタイミングを合わせられる気持ちよさなどを感じた。
- ・一定のリズム、スピードを感じ取ることが大切だと感じた。拍を正確にとるために縄を見たり、縄の音で拍を感じるようになった。
- ・音の拍に体の動きを合わせることにした。最初はリズムはあまり意識できなかったけど意識できました。
- ・自分のできる範囲ではあったが、物を使って楽を感じることができた。
- ・今までとは違う曲調やリズムでカップを回すのが面白かったです。

資料3からみえる音楽的な気づきとしては、徐々に身体の動きとリズムが関連していることに気づいていることが挙げられる。カップスの動きや縄の動き、まりつきの動きといった身体的な活動から身体でリズムを感じとること、息を合わせること、そうしたテンポを自身で刻んでいくことから少しずつ音楽的な要素への発展が窺える。こうした身体的な活動は、身体で音楽することや身体で音楽を感じとることへも繋がっていくことが予想される。

カップスでは上半身の動きとリズム、そして音楽が共に流れる特性がある。また大縄跳びでは全身を使ってリズムを感じて跳んでいく要素となるが、ここでは音楽は流れないことから、自身の身体においてリズムを刻む必要がある。そして、まりつきは手や足の幅広い動きを用いた全身を使う活動であることから、簡単な活動から徐々に難しい活動へと3つの活動を取り入れていくことで学生の意欲や気づき、音楽的な要素への気づきへと発展した可能性も考えられる。

資料4 活動から得たこと

【学びの振り返り／活動から得たこと】

- ・縄の動きとタイミングを見計らい、頭の中で「はい、はい、はい、」の掛け声に合わせて通り抜けていくのがポイントだと思いました。
- ・まりつきでは、足を通すときにボールを強く床につくことを意識しました。
外回しと内回しをやってみて、内側から通す方がやりやすく感じました。
- ・「煮てさ 焼いてさ 食ってさ」のところは、足を通すテンポが速くなるので忙しくて大変でしたが、自分なりに研究しながら取り組めたので、良かったと思います。
- ・カップスでは 曲の終わりにかけてテンポが速くなってしまうことが気になり、意識してピアノに合わせてようと試みました。
- ・まりを回転させたりすることで、多くのレパトリーが増やせるので、普段から頭を働かせようと感じました。
- ・声をかけてタイミング合わせるなどが大事です。
- ・授業を重ねるごとに、叩いてみたらとても面白い音が鳴ったり、これを叩いたらどんな音が鳴るのかを想像するようになっていました。
- ・その物自体でどんな音が出るかななども考えながらやったので楽しかったです。
- ・縄を回す側になった時は、一緒に回す子とのタイミングや跳んでいる子が跳びやすいように地面につくタイミングですくってあげるように回したら跳びやすいのではないかと思います。
- ・気を付けることはみんなで一緒に楽しめる遊びをすることだと思います。
- ・カップソングでは、初めてやったときは全然速いスピードについていけませんでした。回数を重ねるごとに速さに慣れ、円になってカップを回している時もみんなが揃っている感じがしたので、とても楽しかったです。
- ・カップソングでは、隣の人が次、やりやすい位置に回すことを意識しました。
- ・郵便屋さんや大波小波では、縄を回す時は跳び手に合わせて膝を使って回すことを意識しました。
- ・自分の体の動きと音楽、周り人と自分のタイミングを意識しました。
- ・自分たちが工夫するのに苦戦している時に、友達のグループが簡単そうにボールを投げたり、

回転させたりしているのをみて、かっこいいなど感じ影響を受けました。

最初は自分だけで精一杯だったので、他の人のタイミングを気にする余裕がありませんでした。慣れていくと周りの人とのタイミングを気にして、自分もそのタイミングに合わせてやることができました。

- ・タイミングが合っているから上手く行っていると思いました。
- ・いろいろな人のアイデアに出会うことができました。
- ・他の人と合わせる時には、他の友達の音と自分の音の両方耳を傾けることが必要だと分かりました。
- ・みんなであわせてみると、どの人も楽しそうで自然と笑顔になっていたので、音楽って人を笑顔にすることができるものだなと改めて思った。
- ・他の人のやっている姿を見て、「ああ、こういうやり方があったのか」や「これはこうなんだな」などいろいろ発見できました。
- ・自分一人で行うのではなく友達や他の人と行うことで違う面でのアドバイスや考えの共有などが行える。
またほかの人の動きなどを見て自分では気づかなかった所などを知ることができるので大事だと感じました。

資料4では、これまでの活動を振り返り、得た学びとして、カップスの動作や縄の動き、まりのつき方等から、タイミングやリズムを感じることの重要性を記述している学生が多い。

また、そうしたタイミングは息を合わせることであり、リズムが身体の中で刻まれていることや身体で感じ取っていることにつながる。活動を通して学生自身の身体にリズムが生まれていったことが考えられる。さらに、活動を重ねていくうちに他者への配慮が見られる。縄を回す役割の学生は、跳ぼうとする他者をいたわり、また他者との身体の呼吸や動きに共鳴しながら「膝を曲げて回すと跳べるのでは?」「はい、はい」の掛け声といった記述から読み取れる。そうした他者との学びから多くの気づきを得たり、共感したり、自分を他者へ投影したりしながら他者と共に学びを深めていく様子が窺える。

資料5 今後へのつながり

【学びの振り返り／今後へのつながり】

- ・カップを叩くときやまりをつくときの強さによって音も変わるのだということに気づきました。まりをつく速さによっても音が伸びるように聞こえてきたりしました。
- ・モノを使って音楽するのは、音楽を作るみんなと息やタイミングを合わせるので、とても難しいなと思ったし、達成感があるのがやってみて分かりました。
- ・まりつきは 工夫次第で色々なことができるし、毎回違う体の動きで楽しめるところがいい。
- ・音楽のリズムを捉えることに繋がるので音楽をよく聞くようになった。
- ・本来は楽器ではないけど身近にある様々のもので音を奏でてそれを歌に合わせて、みんなでひとつの曲を作ったりできてとっても楽しかったし、いい経験になりました。
- ・やっていくうちに、いろんなやり方(物の叩き方)で人と音楽を楽しむことができるということを改めて実感し、音楽って本当に広いなと感じました。
- ・カップソングでは、みんなでやったときにカップの音がそろって聞こえ、音が一つに聞こえてくるところがとても楽しかったです。
あんな沢山の人数でやったことがなかったのでも楽しかったです。

資料6 今後の自分自身への期待

【学びの振り返り／今後の自分自身への期待】

- ・子どもには音楽の楽しさを教えたいのでみんなでもリズムをとったり、リズムしりとりとかやったら楽しそうだなと思いました。例えば、簡単なリズムを取り入れたり音楽を使わなくても手拍子を入れたり歌うことも音楽だと思うので楽しめる遊びをしたいなと思いました。
- ・4拍と決まった中で拍を取るの難しい点が多いと思うので、まずは音楽に合わせて自由に演奏して楽しむことを感じて欲しいと思います。その中で、先生のリズムに合わせて楽器を演奏してみたり、ジャンプなどの身体を動かすことでリズムを取ったり、簡単にできそうなことから始めていくことに気を付けたいです。上手くりズムが取れない子がいても、否定することなく、楽しめる環境を作ることが大切だと思います。

- ・子どもたちに指導する時には「もっとちがう動きをしてみよう!」「反対の手をついてみよう!」など子どもたちがさらに工夫して楽しく活動できるように心がけたいと思いました。
- ・子どもたちにも小さい時から音楽の技術や知識は関係なく、音楽そのものを子どもの中で感覚的に感じ取り、そこから音楽の楽しさを知ってほしいと思ったので、幼稚園でも取り入れたいと思いました。
- ・音楽の楽しさを自分の体を使って感じてほしいと思う。子どもたちは私たちより感性がとても豊かだと思うので、多くのアイデアが浮かぶと思う。そうなったときに心にしまうのではなく、言葉や行動に示して伝えあい、みんなで共有できるようにしてほしいと思う。子どもたちにも様々な音が出るものを使って音の重なりなどを実際にやってみて感じてほしいなと思います。また友達も一緒にやるから楽しいなどを感じて欲しいです。
- ・音に合わせてリズムをとり体を動かすことの楽しさや、他の人と合わせて体を動かすことの楽しさを知ることができたので保育園などで子供たちに私がこの授業を通して感じた事と同じことを感じることができてほしいと思った。
- ・色んな楽器を使って この楽器はこんな音が出るんだなど新しい発見をしてほしい。楽器を使って皆でリズムに合わせて演奏したり、自分たちで考えたリズムを皆で真似しながら演奏するなどの楽しさも知ってほしいと思った。
- ・ペアでしかできないことを楽しんで、相手とタッチ、カップを素早く交換など少し難しさを入れました。カップソングは難易度を簡単に変えられることができる遊びなので、指導する子どもたちに合わせて楽しめるように考えたいと思いました。

資料5「今後へのつながり」では、さらに活動を通して、音楽的な捉え方へと変容していく姿が見られる。叩く強さ等によって音の強さの違いを感じとったり、モノの素材等から生み出される音への興味へと広がったり、音を聴くことに意識が向くようになっていたりしている。そうした気づきや音の合わせりや共感を他者と共に喜びを体感したり、思いを共有したりすることによって、音や音楽の素晴らしさに気づいていく姿が窺える。

そして、資料6にまとめた「今後の自分自身への期待」には、自らが保育者・教育者になったら、自分と同じ体験を子どもたちにさせてあげたいという気持ちが表れているといえよう。

こうした記述は、学生たちの主体性を掻き立てつつも、活動を通して音・音楽の深化をさせていく授業者の経験値や活動の意図や思いが自然と伝わっていったこととも関係しているものと窺える。まさに、桂(2010)の言う「教室空間内に自律的な表現者共同体をつくり出し、そこに一人の熟達者として参加する形で、『文化的実践への参加』としての学びを実現していること」を体現している学習者の姿であろう。

(2) テキストマイニングによる分析でみえてきたこと

自由記述の分類から、他者との協働から得られた学びや学生自身が着目していった気づきや発見、更には音楽的な学びへの深化へと発展する姿がみえてきた。ここでは、学生の自由記述を更に、テキストマイニングを用いて単語の抽出を行い、どのようなキーワードが頻出するかを質的に分析する。

テキストマイニングにおける言語抽出に関して、町田(2019)は、「『思う』は、それを含む文の命題内容に関与しない用法で使われることが多く、そのままデータとして用いると単語間のネットワーク、クラスター分析、特徴語分析の結果に影響を与えることを示した」と指摘している。本研究では、「思う」を内容と関係ない単語として扱い、さらにそれぞれの活動の名称となる「カップス・大縄跳び・まりつき」といった単語は、文章から省いた上で、テキストマイニングによる分析を行う。

頻出単語からは、「音／リズム／音楽／楽しさ／タイミング／動き／工夫」といった名詞が多く使用されていた。モノとの関わりの中から、学生たちは、音やリズムを感じとっていることが分かる。また生み出される音楽に楽しさを見いだしていることや、他者との関わりの中におけるタイミングにも着目していることが窺える。そうしたことによる身体的な動きは重要で、学生たちは工夫を凝らして様々なアイデアを出

しながら、活動における達成感を味わっていると考えられる。

また、「合わせる／感じる／できる」といった動詞が多く使用されていた。このことから、他者との協働から「合わせる」ことや「感じる」ことに意識を傾けていたと推測される。全体の頻出単語では、「楽しい」といったキーワードが多く見られる。形容詞には、「楽しい／難しい」といった頻出単語が使用されている。これは、協働的な関わりを通じて難しい活動でも投げ出すのではなく、そうした活動にも主体的に挑戦し、意識的に活動へ取り組むことで楽しさを感じられた活動であったことが窺える（表1）。

ワードクラウドからは、頻出単語からも読み取れた「合わせる／リズム／楽しさ／工夫」が活動の中心となったことが窺える。また、学生が「拍／揃える／感じとる／傾ける／刻む／達成感」といったキーワードに着目していることが分かる。拍を感じたり、刻んだり、感じたりすることは身体的な音楽学習活動を通して、意識的に音を感じ取ろうとしているのではないかと考えられる。また、傾けるや揃えるといった

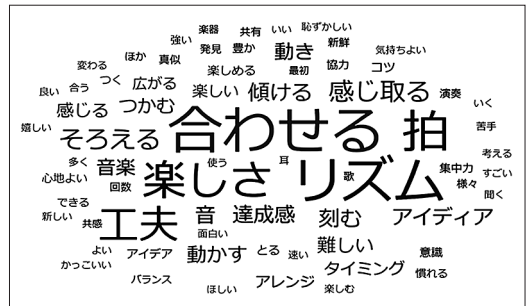


図1 テキストマイニングによるワードクラウド

他者との活動を意識した姿や、本実践における音楽学習活動への達成感も窺える（図1）。

(3) 総合考察

ここまでの分析から、本研究における音楽学習活動において、学習者自身の気づきや発見が生まれ、一人一人が個々の目標を設定し、主体的に取り組む姿が見られた。一方、他者との協働による刺激や学び合いから活動への意欲が生まれ、他者との身体的な関わりや共鳴、そして共有を通して更なる学びが深化していく様子が窺えた。まさに、しなやかなマインドセット (Carol S. Dweck, 2020) とも言えよう。そして、そうした活動を重ねていくことで、初めはモノとの関わりを通して活動していた学習者は、身体的な音楽学習活動を通して、自らの身体と他者の身体からその動きや呼吸のリズムを感じ、音楽的な要素となる鍵を見いだしていく。自らの身体を中心に音やモノ・ヒトやコト（出来事）から音楽することや表現することの楽しさや面白さを感じていったのである。

こうした姿は、社会情動的スキルとして求められる自らの目標を持って意欲的に取り組んでいく力や他者との協働から見出していく学びと言えよう。また学習者の振り返りからは、音楽学習活動を重ねていくことで学びの発展や深化が見受けられる。さらに、自らの体験を、子どもたちへ伝えたいという思いや感情は、音楽学習活動を通して自分自身に自信が持てたことから派生していると考えられる。本研究での音楽学習活動が、こうした自尊心や自信などの社会情動的スキルの育成にもつながったことを物語っている。

表1 搬出単語

品詞	単語	出現回数	品詞	単語	出現回数
名詞	音	20	動詞	合わせる	22
	リズム	16		感じる	13
	音楽	14		できる	10
	楽しさ	13		とる	8
	タイミング	12		楽しむ	6
	動き	11		つく	6
	工夫	10		動かす	5
	拍	6		聞く	5
	アレンジ	5		考える	4
	意識	5		使う	4
	歌	5		いく	4
	達成感	4		刻む	3
	協力	4		広がる	3
	アイデア	3		慣れる	3
	真似	3		合う	3
発見	3	変わる	3		
形容詞	ほか	3	楽しい	17	
	耳	3	難しい	12	
	苦手	3	強い	6	
	最初	3	面白い	3	

5. 結論

本研究ではモノとの関わりを通して息や拍を感じるるとともに、仲間と協働した活動を通して、より創造的な表現が生まれることをねらいとしたが、活動の中で、学生たちが自らの身体を意識するとともに、カップやまり、大縄と親和的になっていく姿がみられた。モノと自分の身体との関係を見つめると、固有のリズムや音が意識される。カップが揃って鳴った時の厚みのある音に感動する人もいれば、自分の心地よいテンポと他者のテンポとの違いを意識する人もいた。大縄では縄の動きと自分のタイミングを多様な感じ方で受け止め、動きの美しい仲間の後ろで、その身体の動きをなぞって同じ呼吸をして歩く姿もあった。まりつきでは、跳ね返るための強さや足のあげ方を工夫するだけでなく、パスしたり上に投げたりというまりとの関係を変える動作を加えた他者の姿から、多様なパフォーマンスが広がった。

「できるようになる」ことが目的でない活動の中で、学生たちは固有の興味と関心をもってモノと関わり、自らの身体との関係を変化させていった。そして、その固有な姿勢は、波のように他者に影響を与え合っていた。仲間と合わせた喜びの経験と根気強く続けた達成感が共鳴し、それが自信となり次の課題に向かう姿となった。一方で、他者との感じ方の違いを意識した学生の中には、まだ見ぬ他者（これから関わる子ども達）に目を向けた者もいた。「難しいと感じる子に寄り添って共感したい」と感じたAや、「無理に団体でやらせるのではなく、一人一人に合った音楽の楽しみ方を見つけてあげることが大切」と書いたMがその例である。これらは他者と協働した活動を経験したからこそその気づきである。

この学習活動において、学生たちは、モノと関わり人と関わり、活動で生まれるコトを問う批評家でもあった。そして、それを支え意味生成の質を深めていく授業者の鑑識眼は重要である。さらに、本研究に研究者が批評家として参加した意味は大きかった。同じような課題を抱えていた2人が話し合う中で、「モノと人の動き、

音楽との関わりを問う」授業構成が生まれ、大縄の動きと息の関係という今までに無かった視点を得ることができた。

また、協同する経験の場に身体を置いて、「今ここで」生成されている意味を問い続ける授業者と、授業者の語りとともに、学生の記述の客観的分析も加え批評する研究者の鑑識眼が加わったことで、「協同実践」としての多様な価値が浮かび上がり、授業者の学びを深めることにもつながった。

保育者や教育者養成に関わらせて協同実践した本研究は、身体的な音楽学習活動を通じて、社会情動的スキルを育む一例になったと考える。

6. おわりに

「協同実践の創造」による授業構成を考える試みは、経験の異なる2人の研究者に喜びと発見をもたらした。今回は一大学での実践にとどまったが、今後さらに省察を深め、学生とともに学びの質を問い深める授業実践をともに創造していきたい。今後、学生同士のオンライン上の交流も視野に入れ、ICTの活用を含め、新たな研究を進めたいと考える。

引用・参考文献

- Covay, E. and W. Carbonaro (2010), "After the bell: Participation in extracurricular activities, classroom behavior, and academic achievement", *Sociology of Education*, Vol. 83/1, pp. 20-45.
- Education, Educational Research and Innovation, OECD Publishing, Paris, <http://dx.doi.org/10.1787/9789264180789-en>. (2020.11.6)
- Hille, A. and J. Schupp (2015), "How learning a musical instrument affects the development of skills", *Economics of Education Review*, Vol. 44, pp. 56-82.
- Hiroko Ikesako and Koji Miyamoto (2015) *Fostering Social and Emotional Skills Through Families, Schools and Communities*, OECD Education Working Papers 121. OECD Publishing. 日本語訳：池迫浩子・宮本晃司訳 (2015) 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成—国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆—, ベネッセ教育総合研究所
- 石井佑可子 (2005), 社会的スキル行使におけるメタ認知の役割：「メタ・ソーシャルスキル」の探索的研

- 究,教育方法の探求, 京都大学8, pp. 38-46.
- 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所 (2019), 「非認知能力」の概念に関する考察 (Ⅱ)～「非認知能力」の要素における関連性の観点から～, 1-28.
- 柿本雄輝 (2020), 単語の出現頻度に基づくテキストの話題分割とラベリング, 情報処理学会, 第82回全国大会講演論文集 2020 (1), pp. 509-510.
- 桂直美 (2020), 芸術に根差す授業構成論—デューイの芸術哲学に基づく理論と実践—, 東信堂
- 桂直美 (2020), 教室空間における文化的実践の創成—アンサンブルの授業における教師と子どもの音楽の生成—, 質的心理学研究, 9, 153-170
- Lewis, C.P. (2004), The Relation between Extracurricular Activities with Academic and Social Competencies in School Age Children: A Meta-Analysis. Texas A&M University.
- 町田佳世子 (2019), 質的研究におけるテキストマイニング活用の利点と留意点—活用研究の検討と頻出単語の特徴をもとに—, 札幌市立大学研究論文集, 札幌市立大学13 (1), pp. 47-53.
- 無藤隆 (2016), 生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか, ベネッセ教育総合研究所「これからの幼児教育」, P18.
- 中村恵・小柳和喜雄・古川恵美 (2019), 社会情動的スキルを育む就学前教育の在り方—フィンランドの幼児教育に学—, 畿央大学紀要16 (2), pp. 19-34.
- OECD (2019), OECD Learning Compass 2030 仮訳, OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクト
- 上枝加乃・宮前義和 (2010), 認知・行動・情動的側面に着目した社愛的スキル尺度の作成, 香川大学教育実践総合研究, 20, 125-133.
- UserLocal, <https://textmining.userlocal.jp/>
(2020.11.7 参照)
- Winner, E., T. Goldstein and S. Vincent-Lancrin (2013), Art for Art's Sake?: The Impact of Arts
- 吉田稔・中川裕志 (2010), 情報の科学と技術, 一般社団法人 情報科学技術協会 60 (6), 230-235.